

芭蕉翁俳諧集 上

0 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7 8 9 110 1

世より一と連歌詠得るをさるるはあきなり
 後白河句をいひてあきなり或とあきなり句は
 人共いひてあきなり句はあきなり句はあきなり
 志らふ中むし連歌は或目くさる後在中
 さるるはあきなり詠得るは連歌の名なり
 一と連歌詠得るは世間にはあきなり
 極むるはあきなり夫より守るべき徳なり
 今宗周あきなり世に先達をあきなり
 付道に教むるはあきなり連歌はあきなり



今更何の事か... 一時の異体
... 故に... 此の...
... 見... 凡百...
... 府... 人...
... 友...
... 現...
... 持...
... 人

小... 彼... 昔...
... 一... 絶...
... 中... 必...
... 安... 卷...
... 標... 佛書

標差幻河沙陀佛書

芭蕉翁詠集上

延寶天和年中

二字及音

あつて何とぬれそひのふくむ汁 桃青
 居合ぬまゝの玉やみゝる人 信章
 拙者もあふと風志深き 信徳
 喜

お應けに月と阿と池の色 章
 あと誰唯とく打とと 徳
 湯油の後ハ湯建と月す 青
 又と志とく小使の身 喜
 半や余にのちやと 酒
 波の若くと伊勢れと 喜
 屋敷とあふとささるに 喜
 かきせ小別や袖と 酒
 丸粒小とととととと 喜

一 器一 まん 是 式 の 意 と
 与 能 け 思 出 所 出 る 意 意 と
 之 一 所 表 之 一 所 推 上 肩 持 也
 稼 新 の 又 一 所 事 不 一 公 善 力
 家 一 つ と 一 つ 鐘 鐺 の 功 徳
 皆 一 つ の 場 也 杖 や 杖 也 人
 之 一 体 一 心 也 之 一 心 也 自
 然 の 一 心 朱 鞘 二 所 也 之 一 心
 一 心 燒 け け け 岸 の 山 也 也

三字中略

一 心 一 心 淨 理 小 一 心 也 也
 一 心 一 心 二 道 化 人 形
 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心
 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心
 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心
 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心
 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心

幸 徳 幸 徳 幸 徳 幸 徳 幸 徳 幸 徳 幸 徳 幸 徳 幸 徳 幸 徳

あまの川流るるに今も秋
よりけ若おれのおもて受たり
思ひのさはれちめ殺しと
雲霧くもりある夕暮のまほろこ
門をりしと読く書か
猶田原身体むよとれきれ
二人の若の宮人小僧
市るもちきかぬともふれを
孫けやけしを張道の母良
喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

雲霧くもり水のまほろこ
浪せま入る大谷のまほろ
天をる地獄の底にまほろ
鉄杖舞の骨も砕くち
喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

飯何え誰信

物のふの能や古心の風中
何れゆくを百能のまほろ
信 德 柳 音

あめのきかひのこころの解ゆく
ふ人力のふ風をさし
くら引くむくも月のたむけ
形衣うきふ石の跡こころ
墨の髻新のたふふの福あぬ
尾ふり袖も程うさく
判らん—いふれ風を来さや
夫と山ふ—海士のふらふ
一念の能とたうとてまふ
喜 徳 喜 喜 徳 喜 喜 喜

かくらち鬼志お神いそを
紙ふりい伊勢の玉うき
神のいのちをこえ—望ぬ
縄—こ夜をひたる切つて
さうつわうはならんこころ
骨うつまふのこころを
まふらふあまふらふ
夕るるれ山風をいひ
あはつさうさうの風を
喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

少梅、牛を動かさしめしむるは

桃喜

まゝや、能人召の化

信喜

くろく、あつた、あつた、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

喜

とく、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ

夜

喜

危く、危く、危く、危く、危く

喜

眠、眠、眠、眠、眠

二日月

喜

山、山、山、山、山

喜

あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

喜

一、う、あ、あ、あ、あ

の松

喜

あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

喜

あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

喜

あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

喜

あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

喜

あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

喜

あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

喜

あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

喜

あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

喜

安川らんの海歌うら山を
雲のつら波 郷をくよ

幸

次 戸を秋志かよふ良ふ

似春

わのくれ浦さしほく月

甲友

神乃石玉をわの袖志

祝言

是きくきくや石の端

山下ー小葉のうけよ

云

白雲からまよふてぬら

云

神乃黄唐子すくは

友

樓をくまを思はく

ウ 海人右之のちや呼ぶ

云

火付のやちさく

云

葉が龍の風ら儀

春

山宿をむく白雲の神

云

金乃甲 顔よる

云

海邊のあちを

粗言

とちくさ砂の露のまよふ
涙のいづく撥通ぬる花
又やもふほむらゐの物候を
南船の石八十に年
ふしや山くさむしとく世に
あしこ原山と切るふらこの
花の庭月のお宿福光り
まゆ柳ふらむ道か有あふら

又さそと証きと尺紅と波たの林
棧の帆と一から十分の月
あふし文とむらう石啼く
山と波と知れしむまあり
鴉帽子とさかしのゆると人かよ
くさかふらり日偏大将
傷ふと柳涙と雲霧のる
まよとくゆとまよとく

う
 限居るはゆららるるに
 柳一輪さきくさきわらう
 令砂子くら拂ふとふ代の好
 けうまの流るるの月
 本職うふ山とらうと共
 詠るう袂と本單の
 弄と思ぢよ何と恨く
 是と余はつく由程の
 物海とてたの抄の人と
 春
 春
 春
 春
 春
 春
 春
 春

長衣のしるき君はる有る
 侍ららるふやう流るや
 寝抱ううとさきよさ
 花のより深山言うう
 宗筆のころうの
 春
 春
 春

深よりわこころらん百作

廣樹

をむさくし 二島 山外記

千春

風の巻之縁乃託とやうきく

卜天

雨双六 舟一 雷とこしこし

曉平

宵のつちをさゆ乃 陳と遊りきり

其角

せんしん 風をさふ月と吸

芭蕉

霧怪くきりや 湯やの 詠をきん

志堂

梧桐の夕へ 鴉子と抱く

似中

松村さよ 怨風まると恨のや

昨雲

娘 酒心 旅年 一 髪をすくむ

言水

ふれくもるも 山崎 小鈴子

瓶子

行はま 塚と 回向 一 してさく

地

袖 桶よ 忘れぬ 夢の 名 折

去

小海を 瓜尔 其 願 こと

尺

情 づる あり 世 世 思 かり 二

重

持 杖の 精 かい 一 三 了

堂

此 物 坊 卒 於 此 女 を 召 召 此 物 持

慈

ハ 都 の 月 二 心 三 三 揮 一 一

角

味もつたよりの病方と夜の事
ほろかしの心を秋の小女
書きたる是別弱き人なり
相成る魁と知りん

晴るの星は子燈なりと結ぶ
這句以て莊子可見見
祿骨の力多きなりと申す
柳書
其角
文麻呂

ふらふらと風を吹く
さよふもく新とくさる部
所んふりし詠しんむ
微雨ゆく麻の山の本の
あまの程くさる命しんむ
つひとくさる眉とあまの
慈悲のうさるはれしんむ
本枯れし食み水のあま
先程と見しりる夜の

楊
角
吉
水
磨
吉
角
磨
角
磨
角

燈とくくく海とまよひの也
古さかしくくくくくく
底を^土まよひまよひまよひ
中かまよひまよひまよひ
松河くくく鏡のつらくくく
くくくくく月とやりく
家よまよひく^照別^見忘
乳とくくく^穀まよひくくく
まよひとくくく^眼まよひ

角 水 角 水 角 水 角 水

くくくくく^候まよひの也
まよひまよひの^候まよひ
清士^推まよひ^候まよひ
くくくくく^如まよひの也
血^指まよひ^候まよひ
まよひ^候まよひ
因^極まよひ^候まよひ
天^帝まよひ^候まよひ
極とまよひ^候まよひ

青 水 角 水 角 水 角 水

句の擔子目のうゝゆゑの次へ
 枯も草の 不背きよの紀
 白親仁のうた打し送る 舞
 瀧の古新 射 子
 仰負と 祈り 縁を 物と 難
 あ層此 水濁る 人牙を 治
 向後ろく け 垣 寺の 喰 鐘と
 杓 把り 物 看 此 祝 意の 白
 意人の 神 入 似 ころ 望 望 望

丸 吉 角 水 磨 角 吉 丸

句の擔子目のうゝゆゑの次へ
 月 見 人 なる 雄 々 子 向 蝶 子 白
 衣 着 せ 文 を 綴 る 夜 次
 衣 着 せ 小 袖 衣 何 と 物 とい ぬ
 物 衣 着 せ ぬ 衣 着 せ ぬ

丸 水 吉 角 丸 角 吉 丸

系系の宮宮の系系たりり
幣幣系系つら系系の系系
角

春春の系系く系系の系系たりり
其角

〜系系の系系たりり
其角

月月の系系く系系の系系たりり
揚角

系系の系系く系系の系系たりり
柳角

かかの系系く系系の系系たりり
丸

山山の系系く系系の系系たりり
角

夕夕の系系く系系の系系たりり
角

折折の系系く系系の系系たりり
角

雨雨の系系く系系の系系たりり
角

系系の系系く系系の系系たりり
丸

〜系系の系系く系系の系系たりり
角

切切の系系く系系の系系たりり
角

福福の系系く系系の系系たりり
丸

ああの系系く系系の系系たりり
角

女の歌ゆきくくくくくくくく
若う底なきにくくくくくくくく
ストット。茶入落しくくくくく
くくくくくくくくくくくくく
秋の末つくくくくくくくくく
為の院の浄法とくくくくく
兔の今人の花を隠りて
子丹一の中とくくくくくくく
二 渾沌おまよふくくくくくく

水 角 九 青 角 九 青 角 九 青

解^解嶺——くく馬鹿くくの山
重^重丘^丘お水^水女^女角^角お^お長^長の^のあ^ある^るく^くく
若^若太^太君^君と^と女^女と^と女^女い^いさ^さふ^ふぬ
棒^棒軍^軍一^一撃^撃や^やら^らあ^あせ^せれ^れ止^止つ^つく
つ^つく^く向^向志^志臨^臨く^くく^く棒^棒く^く強^強引^引
冨^冨の^の心^心と^と法^法の^の主^主れ^れち^ちり^りく^くく
摩^摩訶^訶右^右指^指つ^つ若^若お^お糸^糸割^割回^回る^るく^くく
魯^魯を^を子^子と^と折^折阿^阿盧^盧遮^遮阿^阿羅^羅呼^呼
風^風と^と若^若く^くく^く風^風と^と若^若く^くく^くみ^みく

水 角 九 青 角 九 青 角 九 青

夜の食令一く夜更らる以ハ
解のちささく平ふ後さう
月の林うくこと一の思^{タカ}知^カも
家より一うくむ妹り 為^{タカ}整^カ
物りうく鏡み影の所り又こよ
陰とほりりの奥又よて 陰^{タカ}
小袖うくと本物も母ささくはる
納^{タカ}るの神と^{モク}齋^カ同^カ一^{タカ}み^カあり
煤掃之礼^{タカ}用^カ於^カ黥^カ之^{タカ}晡^カ

角 小 青 角 丸 吉 角 丸 角

やうひ志^{タカ}の^カ暈^カ朶^カ刈^カり入
風^{タカ}うく牛^カえ^カ水^カの^カ影^カる^カま
ま^{タカ}の^カ原^カふ^カる^カ志^カ枯^カ原^カと^カく
懼^{タカ}一^カの^カ小^カ骨^カの^カ付^カる^カ枝^カる
ま^{タカ}は^カ利^カの^カ新^カ法^カと^カ禱^カる^カ折^カ也^カ
禪^{タカ}小^カ僧^カさ^カく^カあ^カる^カ月^カの^カ禱^カと^カ定^カむ
雷^{タカ}盆^カの^カ鳴^カる^カま^カる^カ風^カ
茶^{タカ}の^カ々^カ朔^カ驛^カふ^カ羊^カと^カ西^カ切^カり
梅^{タカ}年^カ一^カわ^カら^カる^カと^カづ^カる^カと^カら^カる

丸 角 水 青 角 磨 青 水 丸

世よあまそくかみをたむけの世中
 行かぬ月年かふと移ると
 氣少きとサカ子の昔より
 結さひとく海氣 潮
 雪はく雪雲をたふさく
 後徳の亭うお歌と後
 樂やうこ徳まて風家林と
 竹中 相織と名せしあま
 方磨 揚子 其角 板香 水 角 丸 水 角 丸

嬌しとまや女を成れ世に
 恋あまきとるる月と討年
 音とのまの松の戸松とこら
 加らとく 宿よあまそく
 髪を結めはらん庭と昔
 卒部 師の男由と調事
 骨刀ちとる松のり外
 瘦くともはとる 歌
 内よら候ととんたきと
 九 喜 角 丸 水 角 丸

米とくまの身よふかき
初まふひくまふけく折れを
每^せ珠^{しゅ}辰^{しん}土^ととく 輪^{りん}海^{かい}を月
半^ハ耕^マ喜^キ磁^ジ乃^ノ牛^ウの^ウ記^キを
燕^エの^ウの^ウふ^フか^カく^クい^イん
^ニ后^コを^ウ志^シや^ウ入^イち^チを^ウく^ク言^{ゴン}
秘^ヒとく^{トク}を^ウ上^ウの^ウ心^{シン}若^{ニク}名^ナの^ウ秘^ヒ
^中申^ウく^クさ^サ。さ^サけ^ケく^ク夜^ヤの^ウ言^{ゴン}路^ロの^ウ思^シ智^チ
桃^{トウ}行^{コウ}切^キつ^ツく^クや^ヤね^ネの^ウか^カけ^ケり^リひ
角 九 喜 角 九 角 九 喜 角 九

風おの角内と牙懐り
入の止みと狼年一のり
雷乃并下^ハく^クう^ウく^クと^ト言^{ゴン}又^ウ
云又とく一龍頭の四
俗のつみ唐路の海の底なる
新の目の東本地部^ハ鰐^ウ
行ことと見えく^ク始^シの^ウか^カね^ネく^クと^ト言^{ゴン}
とくう^ウく^クと^ト言^{ゴン}く^クと^ト言^{ゴン}
月と喜喜^キ又^ウ喜^キ此^シと^トの^ウ片^ヘ水^{スイ}路^ロ
喜 角 九 喜 角 九 喜 角 九 喜 角 九

粟刈あま〜ま子〜と〜ら
うろ窮の羽ひの敷むら〜と
あ〜〜起〜〜帯〜子〜めら
念かき人々思ひ〜おあし
楳〜と〜年〜〜幻思君
たかおのほろ〜〜ま〜〜ふら
い〜ら〜志〜和〜念〜風〜花〜志〜ふら
麻の〜と〜生〜ら〜小館〜と〜お〜ま〜と
か〜枝〜ま〜す〜ら〜る〜生〜れ〜〜〜種子
角 喜 有 九 喜 角 九 有 角

き〜〜〜〜清〜と〜澄〜と〜信〜有〜不
ゆ〜〜〜〜疾〜津〜症〜と〜し〜海〜と〜流
豆〜豆〜の〜食〜〜〜〜行〜め〜た〜〜と〜
人〜死〜と〜終〜〜〜〜生〜〜と〜〜と〜家〜し
石〜の〜白〜は〜波〜あ〜〜と〜る〜〜〜と〜理
本〜玉〜年〜〜〜と〜〜と〜〜〜〜〜〜〜〜柳
水 九 喜 角 九 水

貞享元子年

松寝し——宿の所迄の夕月夜 道彦
 庭くせし——つらむる為 一井
 ちやくしと笑ふをたつと茶菓饗と 越人
 紙漉とん年——以幸あるをら 昌瓊
 吹く物志遠北く——つらむる 高心
 降るの道とん年——以幸あるをら 林之牛
 起るせしと笑ふをたつと茶菓饗と 車膳

みるし——髪此汗ぬらむる 蕉
 投るし——まきこやう附らむる 井
 乳と飲子のふらぬらむる 人
 麻布と焼ひらむら織る 聖
 蘭と——二たて福とせらむら 心
 土のふらむらむらむら 牛
 ちやくしと笑ふをたつと茶菓饗と 燈
 小男麻の道とん年——以幸あるをら 意
 心あるふらむらむらむら 人

風下からけく花のこつと
鳥よ啼く時と遠き

貞享三年

句解百頁

日此をささるる年 露乃歩らぬ
砌あしうき 去りの相のうま
高村の柳又はけり 柳さし
酒を懐く入あむ 此 月
峰の山より来たり乃 鳴らるる玉

玄角

文麟

松風

工斎

青堂

岩竈をうきくみけしうら
里くはたむらたうねふ村さし
くはらり 駒年 勿度ひさし
朝まゝの記之流をぬじさふ公
念佛のねの僧りうくし村
海まじくまねの息をさるん
歌よやくまらむしうまめこえ
有由志利木うら馬帽子をさるん
うら世れ ちあしうまのえぬめ

松風

仙化

中下

奉白

朱弦

飯足

小里

芭蕉

権平

情まじりし君の本懐はもろく
後任女さきめさうらうら
山ふらし氣よめし猿のさき
今こそ甲ねえれは侍と見え
法のとくしう利難きと埋みま
えりしと記しつるさるの戸
は日らら車敷わらさるのうけ
けしとさふ思もわら端を
はり香のころ葉山よめつと九

鱗 角 舟 柁 柁 會 柁 化 臨

ちらう年一碎しと鱗とさう
秋もろ暇さうはら秋なり
いもさし眉とからすさ
嬰子鳴く情さうもろ宿るま
葉もつけれ楓もさる切不入
うはさく下ものおさら狐も
おさき月夜思さう 年
石の戸極熱さるの坊もいざよい
我之代徳刀うり 飛 治

白 里 慈 柁 舟 角 鱗 下

永祿と金左しく松の風
 多江の田舎の徳より知らん
 了る起る中野をせん都に
 船より茶井の浦おもしろし
 篠笠まきく人の娘を居る所
 浮勤の者も年々少くす
 まつちの徳の隣りる中
 友より鱈の物より貴の
 雨さくそ時——くさる鄙

化 慈 松 下 角 里 経 化

門古る君不知後孫の幸
 理ふを舟物より衣土も六七
 阿く野をれ物思はる控へよ
 照のつる夕なり月も路あり
 紀志能を新えり あり
 稿書乃本の名と花の心を
 つきし物より野の心と
 人おちる舟物とわらさき
 酒より松ふ金山う

白 里 角 下 白 松 水 洞

三十一
こたふ志交他と志ある画也
京も河と家醒井の水
玉川やかのく志あるは
江湖くく年くあふまけ
卯は志はこれ精も尺あり
牛くこう路え花くく家
南むく着るの袖の手は天
親と志と打くまよつま
峰は志橋の志もあくら合也

角 彦 化 重 多 不 下 風 舞

三十一
轡の年一寄りし木のころを
唐のち多波わたる人急つた
にくる男は新と書し月
若乃而袂七里もあつらん
伊勢は内志もあつらん
水車も流るるあつらん
梅をさうあ理の境くもあつらん
二月の志もあつらん
姉弟の牛一の志もあつらん

彦 角 重 多 不 下 風 舞

物あしぬ 紳の端と織りこ
けの心あしぬ 半す夏の心
夏の心あしぬ 半す夏の心
春の心あしぬ 半す夏の心
因人こまやうして 体ひる 節月
取さし 心より 長らつ 心
同し 心家と 春の心 心
こころあしぬ 半す夏の心
之交あしぬ 半す夏の心

蕉 凡 麟 下 富 下 春 下 化

あしぬ 半す夏の心
順地も 心あしぬ 半す夏の心
心あしぬ 半す夏の心
牛心も 半す夏の心
秋も 心あしぬ 半す夏の心
村も 心あしぬ 半す夏の心
飽も 心あしぬ 半す夏の心
浮橋も 心あしぬ 半す夏の心
けや 心あしぬ 半す夏の心

下 能 童 白 高 水 化 下

信長此法も世やまへん
 唐土とあつてあつて
 ねり牡丹十里のあつて
 重すも名よあつて
 岩根ふくまゝ地を
 笑ふやあつて
 色あつて
 笑ふとあつて
 是川のあつて

水 春 角 正 化 童 水

舟とあつて
 唐土とあつて
 唐土とあつて
 唐土とあつて
 唐土とあつて
 唐土とあつて
 唐土とあつて

角 風 水 卜 白

花あつて七日
 唐土とあつて
 唐土とあつて
 唐土とあつて
 唐土とあつて

唐土 唐土 唐土

足跡もあつたやうな水が流れて
 半つ外とてしうらつきの戸
 若月と隣と移るる草の
 枝又くうしま 柳のそよと 川
 う 星の流るるをうらまのあつた
 内印の下向 静かなるをうら
 といふまに討つ子の使つた
 一ね流るるをうらまのあつた
 松明も新えんといふあつた
 凡 白 良 意 角

牛のけしきのもろのあつた
 飛つたらしきあつたあつた
 舟のけしきのもろのあつた
 高きともろのあつたあつた
 船のけしきのもろのあつた
 門はぬ湯泉とてあつたあつた
 といふともろのあつたあつた
 男明くた白粉とてあつた
 凡 山嵐 舟 意 角 白 舟 良 凡

晴みよ明の風流もよめる
後まうく 牡丹らつまつ
耳くくく 妹の若さるる
つよきわく さらばよるまは
松燈も刀はらうまつ
我くつ 彦と敵の山
櫛もく 相違をく 海流
糸の月夜をく 踊る
るもく 物やむくの福

角 白 意 良 比 角 舟 吾

眉めく 神の世をく
唐の文よめく くら
か思ひのり 音流 止
言く 古若る 持 破 廻
何や ちく 地やの
お国の極路ひく 花や
車く ちく ちく

蕉 良 夜 風 意 角 白

破風はふりくけやうらうら夕まき

煮茶 蠅避烟

芭蕉 志堂

合歡 醒馬上

かきあふ小田の少なきとあり

月代 見金氣

芭蕉 志堂

露般系 添玉 涎

張旭のめれと書るぬる碑の中

芭蕉

情とたたるもむし牛

却午 蕭 驅 偷 蕉

芭蕉

ゆりささるやうに海の沖祝屋

芭蕉

くろくろの首のまきる板の撥

乳とのむ絲の行とるる入る

舟 鑄 風 早 浦

芭蕉

鐘 絶 日 高 川

顔より子苗の泥よりさるんて

芭蕉

めしとて煉るる坂やうたの歌

訛 教 三 社 本

芭蕉

韻 使 五 車 項

ライシスエトス

名
蒼月丈山閣

篠と杖はくをのくくんと

剪刀銀鮎一寸

笑西の浪の玉と鶯くん

朝日くくくらの鉈をかくし

風殫 唯早乾

くまらら春のよあつて林と

ゆ々火とくくくをくくく

霧、籬韻孰興

堂

堂

堂

堂

、

堂

堂

堂

雲浦月濤

浦ま若くくく夜に何くく家を知

わくくく松の松珠と眼は

山伏山平地

門番門小天

鷓鴣窺水鉢

くくくくくくくくくくく

奥海くくくくくくくくく

臨谷伴蛙仙

堂

堂

堂

堂

、

堂

堂

堂

苑咲く人こまの家草の底
 歌板をうらふ山あさの程
 信法師やたづらの役をさえそ
 鼓合くらしきよきうら
 櫛のそあふころふ集を書かぬ
 中よゆらん書あさくし
 物うきと悪のやと記よ月夜
 咲くよあさとあおの朝か
 ちとくくと世旅くしる秋のあ
 為 遠 せ 為 遠 沽 沽 為 世

九輪をかさす屋上ころり
 風の音あふふ後珠のいさ
 大はるをうらむ夜あさ
 うつろく旭のむすころあ
 印くらしき屋を編くし
 一神の記念の連続孫あ
 名あふぬあさあさの秋ひ
 雨あふく後あむら男つ
 水際とらふ声柳子の声
 世 遠 沽 世 為 沽 産 世 沽

襦袢の袖の端のきざり
柳の葉を流るる

襦袢

其代

襦袢の袖と抱ゆる父の
涙の流るる母の袖の
衣の縫い目と縁の
山を越ゆる石の
入月を薄化粧の
衣志一人

襦袢
襦袢
襦袢
襦袢
襦袢
襦袢

紫のかわらぬ
山を越ゆる石の
衣の縫い目と縁の
山を越ゆる石の
衣の縫い目と縁の
山を越ゆる石の
衣の縫い目と縁の
山を越ゆる石の
衣の縫い目と縁の

襦袢
襦袢
襦袢
襦袢
襦袢
襦袢
襦袢
襦袢

持の月しめさるる俗瘧く
混つぶさあうは救う十
くつくまこく砧や啼ぬらん
四十在らう風七方めしあ
嵐雪 意 信 意

江戸極うら面入ん幾くれ
うらこのおれあかしうき月
貝拾いしゆく破あれと
湯子 意 意 嵐雪

醉くを人志肩よりうつく
くまがる徳いし面あつ祀あめ舞
根松苗杉鯨のたうくしえ
比の橋きさうしゆめ坂あつと
湊入り帆乃しゆらる根に
世の中と画よのうららる茶の畑
妹うかしらめ屋場やさうさ
記念とく入徳あめあめのかうし
あふに古きく園の節うみ
其角 意 子 意 子 角 子 意 子

津の玉忍狩皮くも物うりそ
二ねまきりりの花世まうり
一巻のま初と山にふり
苗代りもふるふに年ら ねり
詠のる糸のしつらあかき遠く
祇宮ちりうらる 去の夕月

恋 香 子 言 恋 子

芭蕉翁 詠 佳木上 終



